# 平成２４年度　生活福祉委員会　管外行政視察報告書

報告者：いその　弘三

報告書担当部門　　小樽市
「小樽・北しりべし成年後見センター」
「小樽ガラス市」

１・小樽・北しりべし成年後見センターについて

まず、小樽市の人口は、平成２４年９月現在で１２９，９４７人で、高齢者人口は４２，６２８人で高齢化率は３２％を超えており、我が目黒区と同様に、高齢者施策、特に認知症や知的・精神障害者などの人権や財産の保全をどう担保していくのかが課題となっており、小樽市及び北後志５町村ですでに成年後見にとして活動していた弁護士、司法書士、社会福祉士などの専門職や家庭裁判所の元調査官などの「専門後見人」は絶対数が不足しており、一人当たりの担当件数も多く将来的には対応できず立ち行かない状況が見えていたようである。

この状況から、早急に別の方策を考え対応をしなくてはいけない状況から、別の形での後見人の養成と活動支援の仕組みづくりが必要であることから、平成２０年２月に「小樽市における成年後見センター設立及び市民後見人要請についての検討委員会が発足した。

大きな課題としては、大都市圏と違い専門職を確保することが難しく、包括支援センターと同居しながらのセンター設置となった。

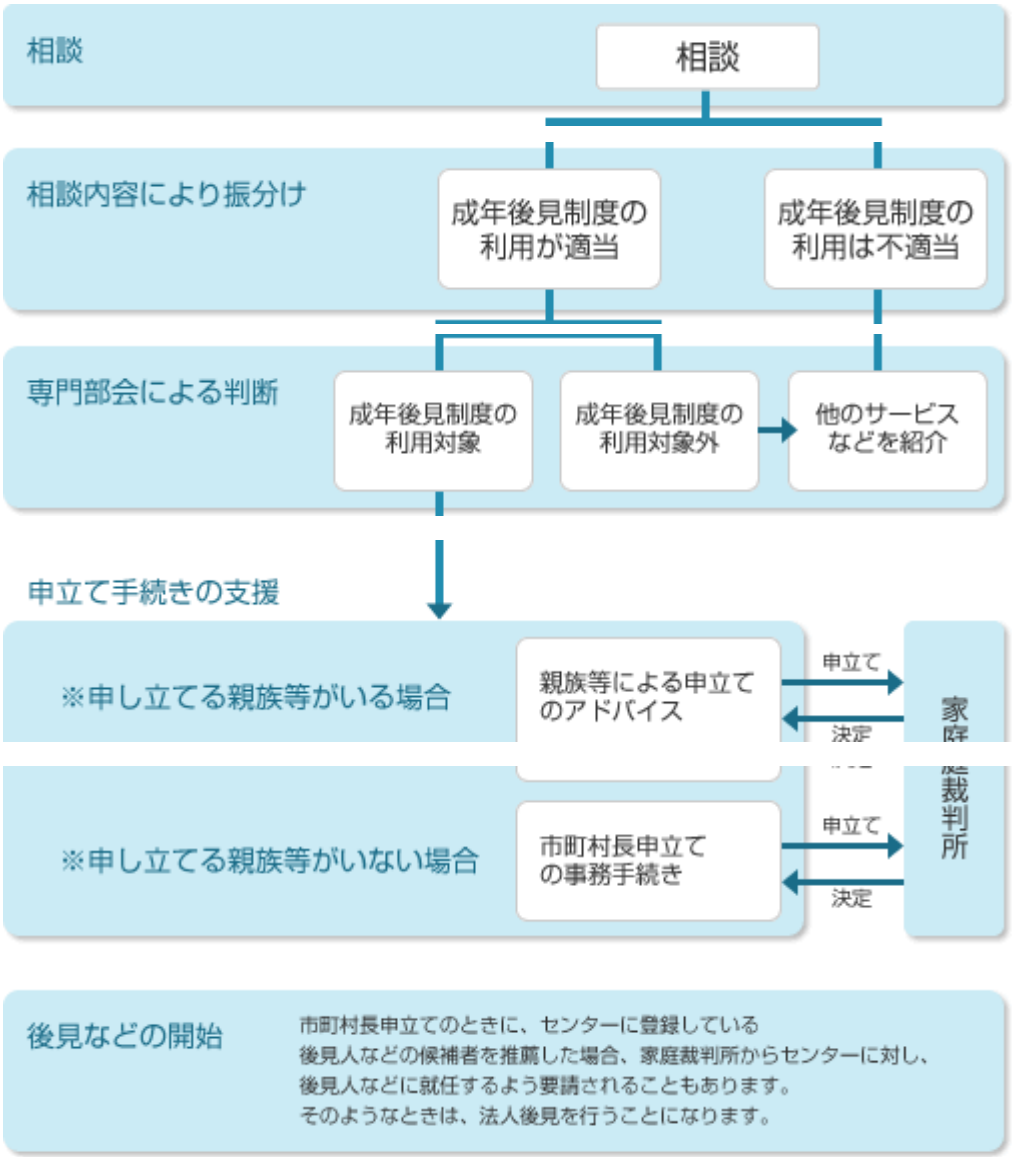
設立に先駆けて、数年前から小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」において、市民後見人養成事業がおこなわれてきたが、平成２２年度から小樽市において成年後見センターにおいて、市民後見人養成講座(基礎編・実践編)を開催し、翌平成２３年度には余市町社会福祉協議会が６市町村圏域の住民を対象に養成講座も実施してきた。

センター発足当初、協力専門職が９名、市民後見人が１２名で活動されていましたが、現時点で協力専門職６名、市民後見人は２９名となっており、今後も増加傾向である高齢化・後見需要に対応するために市民後見人をいかに養成し、スキルアップを図っていくかが最も重要な事と捉えられていた。

**後見・補佐・補助開始までイメージチャートは次ページに記す**

## 後見・補佐・補助開始までのイメージ

当センターで相談を受けたときの後見など（後見・補佐・補助）開始までのイメージ




※相談は無料です。

（イメージ図は小樽市社旗福祉協議会 HP より）

先に記述した実際の状況として、市民後見人２９名の内、実際に前向きに活動ができる方は１０名程度であり、当初は良かったが、仕事に支障が出るなどして半分以上の多くの方が後見活動を推進できない状況にあるようだ。また、予算関係も介護特別会計・一般会計の実質市の一般会計繰り出し金は２，０１３，０００円でおよそ３割を一般財源から投入しなければならない状況は、当初平成２２年度申立件数２件に対し、現在は３１件の申立件数と推移しており、拡大傾向にある同施策については予算の拡大、後見人の確保・育成と小樽市だけでなく、目黒区や他自治体共通の課題となっていることは間違いない。

２・「小樽ガラス市」について

小樽のガラス製造の起源は古く、明治２０年代からの製造販売の記録があるほか、現在まで続いている浅原硝子製造所(創生者　浅原久吉氏)も明治３３年に事業が起こされ、石油ランプや漁業用の浮き球などを製造販売していた。現在も３代目がお土産用の浮き球やペーパーウェイト、食器などを製造販売している。

（資料は小樽雪あかりの路実行委員会 HP より）

まず、運河であるが大正１２年（１９２３年）に完成した小樽運河は長さ１３００ｍ、幅４０ｍの水路として生まれた。海上に停泊した船舶からの貨物の荷揚げには艀（はしけ）舟が使われた。運河方式ともいうべき荷揚げスタイルは戦後の樺太輸送の断絶と、太平洋側の苫小牧港の整備、小樽港湾内の埠頭の整備によって衰退していったという事である。また、昭和４０年代になると既に無用の長物と化して

いた小樽運河を埋め立て、道路として整備する方針が小樽市によって打ち出され、これに対し運河の保存運動が全国規模で高まった。市側は当初の全面埋め立てに対し、運河の半分の幅を残す妥協案を提示するが、全面保存を求める保存派と意見が折り合わないまま、昭和５８年には埋め立て工事が着手、昭和６１年には道道小樽臨港線が開通する。運河の沿線には「小樽運河ふれあいの散歩道」として散策路が整備されたという事であるが、運河整備の時にも大議論が展開され、埋め立て計画時にも大激論がされている。

この、運河という場が観光の目玉になり、「小樽潮まつり」と共にガラス市が催され潮まつりは４６回におよび、ガラス市は４回を数える事業となった。

つまり、運河跡地という「場」の１台議論から折衷案が採用された結果によってガラス市を含む小樽市の観光・産業が活性化したのは言うまでもなく、運河・海・鉄道後など観光資源とガラスなどの文化的・芸術性が折り重なった形で３万人を超える観光事業に拡大している様子である。当初役所では正直ここまでの効果が出ることは期待していなかったようであるが、民主導と行政協力という協働性とマッチした形が功を奏したことといえる。

課題が全くないわけではなく、潮まつりは３万人からの来場者があるわけだが、当然トイレは多くの仮設トイレを設置しているが、ガラス市としてはトイレ設置はしていない。特に冬の小樽ガラス市は当然冬の時期におこなう事業であることから来年度以降課題であるという事であった。

目黒区でも多くの来場者がある事業などがあり、特に最近では目黒川沿いでの桜まつりにおける、トイレ・ゴミ・道路不法占用の露店などなど、色々な課題が待ったなしの状態となってきた。

是非とも次は、潮まつりの時期と冬の小樽ガラス市などの時期に直接お邪魔し観光の視点や安全な事業運営と魅力などについて実際に見させていただきたいと思います。

最後に小樽市市役所　議会事務局の皆様のご協力によって参考になることが多々ございました。この報告書の場をお借りして御礼申し上げると共に、御市がますますご発展することを願い報告とさせていただきます。

以上